

第1章 遺跡を取り巻く環境と概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、徳島市庄町1丁目および蔵本町2丁目・3丁目にまたがって所在し、徳島県遺跡地図（徳島県教委・徳島県埋文編，2006）上では、蔵本遺跡の大部分および庄遺跡の東端を含む範囲に位置する（図1-1-1）。本学では『庄・蔵本遺跡1』（北條編，1998）の刊行以降、同キャンパス内の遺跡については、独自にこの名称を用いており、本書でもこれに従う。

庄・蔵本遺跡は、吉野川の支流である鮎喰川の下流域右岸、四国山地東端の眉山北麓に位置する。現在の鮎喰川は、四国山地の雲早山に源を発し、外帯を約50km北流して吉野川と合流する。下流域では、数面の沖積段丘面を伴う扇状地性平野が発達することが知られている。また、上流域では御荷鉾構造線をはじめとする複数の破碎帯を通過し、また地すべりや山腹崩壊により、下流域の平野部において、礫層が厚く発達し、礫床河道となっている（古田，2005）。

吉野川下流域から河口付近にかけての古環境復元の研究によれば、約2万～1万8千年前の海水準は、現在に比べ約100m前後低く、その後の温暖化にともない次第に上昇したとされる。約6千年前の縄文海進のピーク時には、吉野川河口部の汀線は、現在の地形面の標高5m程度内陸に入り込んでいたと推定され、鮎喰川は直接、紀伊水道に注ぎ込み、河口部に三角州性扇状地を形成したとみられている。その後、やや寒冷化する弥生時代以降、海面の低下と吉野川から流出した土砂の堆積により、三角州が発達していく（古田，1996，2002，松井，1998）。

第2節 歴史的環境

庄・蔵本遺跡は、縄文時代晩期から近現代にいたるまでの複合遺跡である。その形成過程を正しく理解するためには、当然のことながら、周辺の遺跡まで視野に広げることが不可欠である。そこで、周辺遺跡について、以下、時代順に概観する。

旧石器時代 現在のところ、庄・蔵本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は確認されていない。徳島県内においては、吉野川中・下流域の北岸に遺跡が分布する（氏家，2002）。

縄文時代 徳島県内において、縄文時代草創期～前期の遺跡は存在するものの、遺跡数は限られ、その様相は不明瞭である。中期になると、遺跡数が若干増加し、三好郡東みよし町の加茂谷川支流沿いに位置する加茂谷川1号岩陰や、吉野川中流域の美馬郡つるぎ町貞光前田遺跡では、船元I式・里木II式土器が確認されている。鮎喰川下流域左岸の矢野遺跡（図1-1-18）では、中期末～後期前葉の居住域が検出されている（湯浅，2002）。

庄・蔵本遺跡周辺で、遺跡形成が顕著となるのは後期後葉以降であり（中村編，2011）、庄遺跡（図1-1-6）の財務省蔵本住宅地点では、後期後葉の住居跡1棟が検出されている（岡山編，1999）。また、同遺跡の各調査地点では、後期末～晩期前半の土器や石器が確認されている（湯浅，2002，中村編，



図 1-1 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置

1. 庄・蔵本遺跡 2. 蜂須賀家万年山墓所 3. 三谷遺跡 4. 南蔵本遺跡 5. 蔵本遺跡 6. 庄遺跡 7. 中島田遺跡 8. 南庄遺跡 9. 袋井用水の水源地 10. 鮎喰遺跡 11. 名東遺跡 12. 節句山 1号墳 13. 節句山 2号墳 14. 穴不動古墳 15. 八人塚古墳 16. 敷地遺跡 17. 観音寺遺跡 18. 矢野遺跡 19. 延命遺跡(徳島県教委・徳島県埋文編, 2006をもとに作成)

2011)。名東遺跡(図 1-1-11)では、晩期後半の自然落ち込みから突帯文土器と石器が出土し(勝浦編, 1990), 三谷遺跡(図 1-1-3)ではそれより新しい時期に位置づけられる, 突帯文土器と遠賀川式土器との共伴関係が確認されている(勝浦編, 1997)。

弥生時代 庄・蔵本遺跡では、弥生時代前期前葉～中葉の居住域・墓域・生産域からなる集落の全容が把握され、隣接する南蔵本遺跡(図 1-1-4)まで広がることが確認されている(近藤編, 2014 ほか)。これらの遺跡では、前期末から中期初頭の洪水起源砂層が確認されており、洪水砂によって集落のほとんどが埋没したものと推定されている(中村編, 2011 ほか)。庄・蔵本遺跡や名東遺跡周辺で確認された自然流路は、鮎喰川の旧分流の一部とみられ、弥生時代初期の居住域は、これらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に存在したと考えられている(古田, 2005)。

庄・蔵本遺跡一帯では、中期前葉～中葉の遺構は極めて少なく、この時期の集落構造は判然としない。中期後葉になると、居住域や墓域が明瞭になる。鮎喰川流域では、右岸の名東遺跡や庄・蔵本遺跡一帯で数十基の方形周溝墓、左岸の矢野遺跡(図 1-1-18)で、30 棟前後の竪穴住居跡が確認されている。ただし、水田などの生産域はわかっていない(近藤, 2012)。つづいて後期初頭になると、これらの遺跡一帯では、遺構、遺物の数はともに極端に減少する(近藤, 2012)。なお、名東遺跡(図 1-1-11)では、中期後葉～後期初頭の所産とみられる扁平紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている(勝浦編, 1990)。

後期前半は、中期後半に比べ、竪穴住居跡の数は少なく、墓域や生産域も不明瞭である。その後、

後期後半～終末期になると、竪穴住居跡数は増加し、中期後半の数を上回るようになる。矢野遺跡（図1-1-18）では、蛇紋岩製勾玉の未成品や鍛冶関連遺構、突線紐式銅鐸の埋納遺構が確認されている。矢野遺跡の南に隣接する延命遺跡（図1-1-19）では、墳丘墓などからなる墓域が認められ、石井城ノ内遺跡では水田が確認されている（近藤，2012）。

古墳時代 眉山西北麓の丘陵尾根上には、前期古墳が点在する。節句山古墳群（図1-1-12・13）の2号墳からは、浮彫式獣帯鏡が出土している。本学考古学研究室が測量調査を実施した八人塚古墳（図1-1-15）は、全長約60mの前方後円墳で、川原石を用いた積石塚である（東ほか，2006）。庄・蔵本遺跡の南側に面した眉山北麓では、今のところ前期古墳や居住域は確認されていない。中期の古墳、居住域もまた未発見である。後期になると、横穴式石室をもつ穴不動古墳（図1-1-14）などがみられるが、やはり集落域はわかっていない（北條編，1998，中村編，2011）。

古代 敷地遺跡（図1-1-16）や観音寺遺跡（図1-1-17）の発掘調査により、多数の木簡および多彩な遺構・遺物が確認され（藤川編，2002ほか）、これらの遺跡一帯は、国府であった可能性が高い（藤川，2015ほか）。庄・蔵本遺跡と名東遺跡周辺では、大型の掘立柱建物跡や墨書土器、石帯、木製祭祀具などが相対的に多く出土しており、郡衙である名東郡にあたる可能性が指摘されている（早淵，2002，藤川，2002）。また、この一帯では条里地割に関係するとみられる溝が検出されている。

中世 12世紀後半～13世紀が中心時期とされる中島田遺跡（図1-1-7）では、道路状遺構と、その両側で屋敷地区画が確認されている。また、県内の他の遺跡で多数を占める和泉型瓦器椀よりも、吉備系土師器椀が多数出土したことが注目されている（石尾，2002b，島田，2008）。そこから、この遺跡を物資の集散地とみなし、さらに「市庭」跡（福家，2002）や「市町」（石尾，2002b）と解釈する見解も提出されている。名東遺跡や庄遺跡周辺では、溝などの遺構や瓦器・土師器などの遺物が検出されているが、遺跡の性格ははっきりしない（福家，2002，島田，2008）。

近世 庄・蔵本遺跡一帯は、城下町周辺の散村および水田であった可能性が高く、後述する鮎喰川の改修工事などにより水田開発が進められていったと考えられる。この時期の水田開発により、古墳時代から中世にかけての遺構の多くが、削平された可能性が指摘されている（中村編，2011）。また、佐古に所在する蜂須賀家万年山墓所（図1-1-2）は、10代藩主蜂須賀重喜が藩政改革を背景に造成した儒式の墓地で、以後、蜂須賀家は仏式の興源寺と儒式の万年山による両墓制をとるようになった（徳島県の歴史散歩編，2009）。

鮎喰川の河川改修の記録としては、天正15年（1585）の「逢庵堤」が知られている。これは徳島城の築城および名東郡の洪水対策のために、右岸の築堤が行われたというものである。その後、享保年間（1716～1736年）や寛政年間（1783～1792年）の工事によって、右岸の連続築堤が完成された。しかし、逆にこれが天井川化を加速させ、今日にいたる洪水被害の一因となったという（古田，2005）。ほかに、元禄年間（1688～1704年）には、鮎喰川流域右岸の水不足解消のため、袋井用水（図1-1-9）の開削が開始されたという記録もある。また、蔵本付近は伊予街道と讃岐街道の分岐点に位置し、交通の要所でもあった（ふるさと徳島編，1991）。

近現代 現在の蔵本キャンパスとその周辺にあたる区域では、1907年、陸軍第10旅団司令部、歩兵第62連隊が設置されたが、第1次大戦後は廃止された。これにかわり1925年、歩兵第43連隊が

移駐し、以後、1945年まで存続することとなった。また、1908年に徳島衛戍病院が設けられ、その後、徳島陸軍病院と改称された。1945年7月4日の徳島大空襲後には、同月24日に1トン爆弾によって、歩兵第43連隊本部を標的とした蔵本空襲があった（山川、1995）。

終戦後まもなく連隊跡地には、1947年に官制徳島医学専門学校および同附属病院が移転し、翌年には徳島医科大学および同附属病院となった。1949年には、国立大学徳島大学および同附属病院が設置された。また、陸軍病院跡には県立中央病院、練兵場跡には蔵本公園・加茂名中学校、実弾射撃場跡には徳島県立林業試験場（林業総合技術センター）が、それぞれ置かれることとなった（ふるさと徳島編、1991）。

第3節 庄・蔵本遺跡の概要

1982年に始まった蔵本キャンパスでの発掘調査は、2018年3月現在、計31次にも及び、35,000㎡以上の面積がその対象となった（図1-2、表1-1）。前節でも適宜触れてきたが、ここではとくに個々の調査地点に焦点をあて、その成果を振り返っておきたい。

庄・蔵本遺跡では、縄文時代から現代にいたるまでの幅広い時期の、遺構・遺物が多数確認されている。なかでも、弥生時代前期前葉～中葉のものについては、墓域・生産域・居住域からなる集落の全体像を描き出すほどの成果が得られており、注目される。

この時期の墓域については、構内の南西部（第6次調査地点）と南東部（本書のボイラータンク地点、第22次調査地点）の二か所で確認されている（中村、2002）。このうち、第6次調査地点では、石棺墓・配石墓・土壙墓・甕棺墓といった計20基以上の墓からなる墓域が検出され、すでに報告を終えている（北條編、1998）。

生産域については、水田跡が検出されており（第17・19・24・28次調査地点）、これが本遺跡の東側に位置する南蔵本遺跡県立中央病院地点まで広がることがわかっている（近藤編、2014）。また、構内の南端を東流する旧河道（第5・13・15・16・27次）と、ここから分岐する水路網（第5・9・10・13・15・16・26・27・29次など）が検出され、水田への給水システムも判明しつつある。さらに、第20次調査では、畝を伴う畑跡（中村、2009b）が確認されている。こうした弥生時代前期中葉の畑跡の検出例は、全国的にみても極めてまれであり、特筆に値する。第27次調査でも畝状の遺構が検出されており、これも畑跡の可能性がある（端野ほか、2015）。

居住域については、第1～3・15次調査では、構内で土坑群が検出され、その存在がうかがえるものの、明確な住居跡は検出されていない。ただし、庄・蔵本遺跡の南側に位置する南蔵本遺跡では、この時期の住居跡が数基検出されており（徳島市教委、1989、中村、1998、2002ほか）、遺跡南側の眉山北麓に居住域の存在が推定される。また、この時期の植物種実や木製品が良好な状態で検出されたことは、考古学だけではなく植物学的にもきわめて重要な成果といえる（中村、2009b・2010c、端野ほか、2015ほか）。

以上の弥生時代前期前葉～中葉の集落は、遅くとも弥生時代前期末から中期初頭にかけての時期に、その大部分が洪水砂によって埋没したとみられている（中村編、2011ほか）。この洪水砂層上に堆積

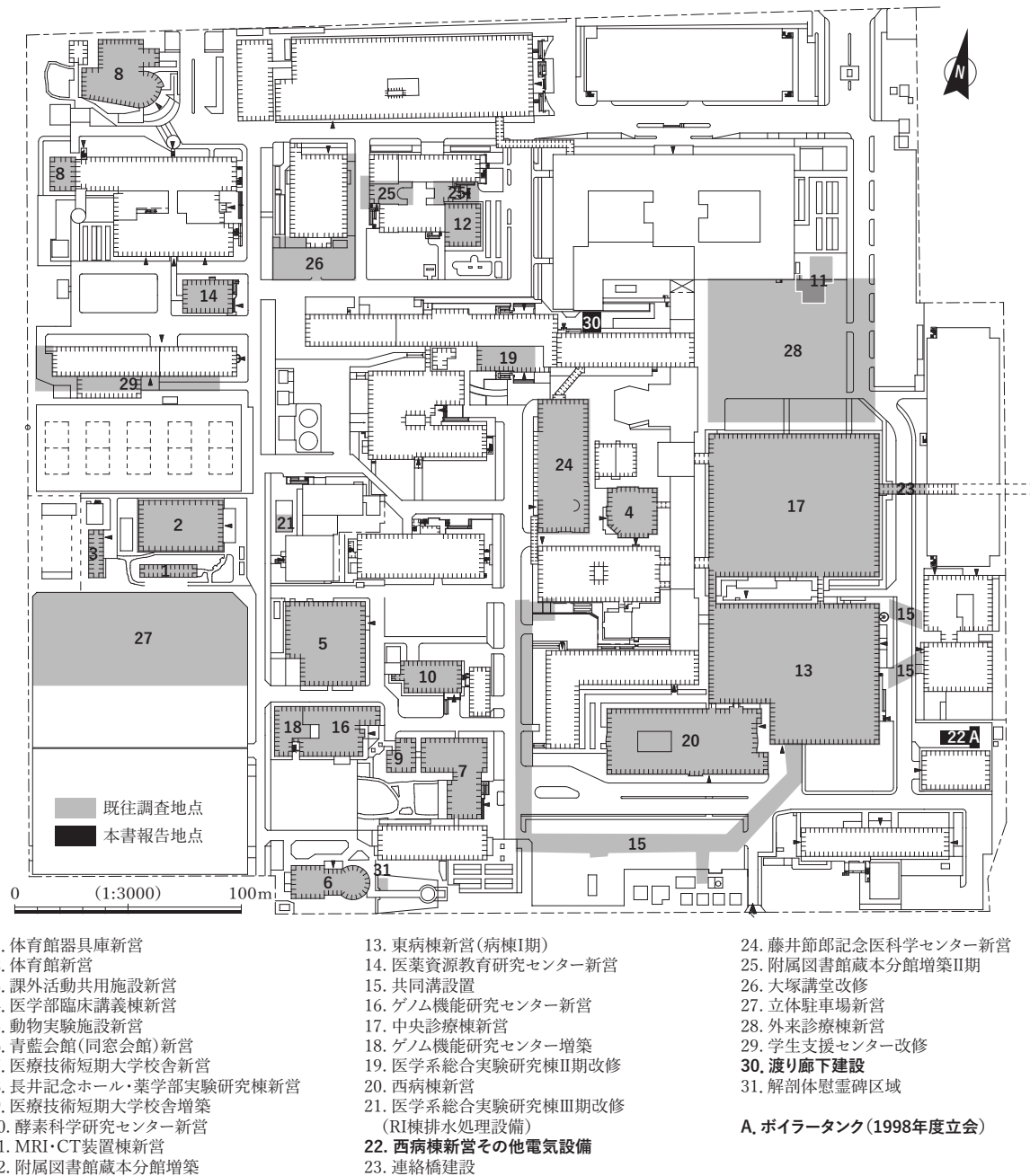


図1-2 庄・蔵本遺跡における調査地点の位置

した弥生時代前期末・中期初頭～中世の土層は、土壌化が著しく進行し、時期ごとに遺構面を検出することは困難である。そのため、この間については、集落の全体像を描くことは難しい。断片的な把握にとどまるが、重要な遺構・遺物について以下、詳述する。

第7次調査では、弥生時代中期初頭～中葉の溝が検出されている。この時期の遺構は、本遺跡一帯では検出例が極めて少なく、集落構造の変遷を押さえるうえで、貴重な資料である。構内の南半部に位置する第2・13・16・20・27次調査地点では、弥生時代中期後葉前後の方形周溝墓が確認されている(定森・中村編, 2005, 中村, 2009b, 端野ほか, 2015ほか)。また、第16・18次調査地点では、終末期の鍛冶関連遺構をはじめ、鞆の羽口、鉄器、スラグ、石製の鉄槌や砥石が出土しており

表 1-1 庄・蔵本遺跡発掘調査一覧

調査 回数	調査地点	調査 年度	調査期間	調査主体	調査担当者 *○は調査主任	調査面積 (㎡)	文献
1	体育館器具庫新営	1982	1982年11月30日～1983年2月5日(2か月)	徳島県教育委員会	島巡賢二, 秋山浩一ほか	147	中村編2010a
2	体育館新営	1982・1983	1983年1月中旬～11月30日(10か月)	徳島県教育委員会	福家清司, 久保脇美朗ほか	1160	定森・中村編, 中村編2010a
3	課外活動共用施設新営	1984	1984年7月3日～8月10日(1か月)	徳島県教育委員会	福家清司, 久保脇美朗ほか	157	中村編2011
4	医学部臨床講義棟新営	1985	1985年4月25日～7月14日(3か月)	徳島県教育委員会	松永住美, 大谷泰久ほか	655	中村編2010a
5	動物実験施設新営	1985	1985年9月2日～12月28日(4か月)	徳島県教育委員会	松永住美, 大谷泰久ほか	1321	中村編2008
6	青藍会館(同窓会館)新営	1986	1986年12月11日～1987年3月20日(3か月)	徳島大学	岡内三眞, 河野雄次ほか	540	北條編1998
7	医療技術短期大学校舎新営	1987	1987年4月1日～8月31日(4か月)	徳島県教育委員会	羽山久男, 久保脇美朗ほか	870	中村編2011
8	長井記念ホール・薬学部実験研究棟新営	1990	1990年1月11日～2月28日(1か月)	徳島大学	岡内三眞, 桑原久男	1430	北條編1998
9	医療技術短期大学校舎増築	1992	1992年7月11日～9月4日(3か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	310	北條編1998
10	酵素科学研究センター新営	1993	1993年5月26日～9月30日(4か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	623	北條編1998
11	MRI・CT装置棟新営	1993	1994年2月18日～3月17日(1か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	224	HPに概要報告書を掲載
12	附属図書館蔵本分館増築	1993	1994年2月25日～3月24日(1か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	288	HPに概要報告書を掲載
13	東病棟新営(病棟Ⅰ期)	1994～1996	1995年3月27日～1996年7月31日(16か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	5000	中村編2010b, HPに概要報告書を掲載
14	医薬資源教育研究センター新営	1995	1995年6月21日～9月5日(3か月)	徳島大学	東潮, ○橋本達也	300	HPに概要報告書を掲載
15	共同溝設置	1996・1997	1996年11月1日～1997年7月(7か月)	徳島大学	北條芳隆, 橋本達也, ○中村豊	1754	HPに概要報告書を掲載
16	ゲノム機能研究センター新営	1998	1998年9月1日～1999年2月2日(5か月)	徳島大学	北條芳隆, ○橋本達也, 中村豊	1000	HPに概要報告書を掲載
17	中央診療棟新営	1999	1999年8月1日～2000年3月(8か月)	徳島大学	北條芳隆, ○中村豊	5000	HPに概要報告書を掲載
18	ゲノム機能研究センター増築	2001・2002	2002年3月11日～6月10日(3か月)	徳島大学	北條芳隆, ○中村豊	311	HPに概要報告書を掲載
19	医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修	2006	2006年4月17日～7月25日(3か月)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊, 中原計	324	中村編2008
20	西病棟新営	2006	2006年6月27日～2007年3月15日(9か月)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊, 中原計	2645	中村編2008
21	医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修(RI棟排水処理設備)	2007	2007年10月22日～11月7日(2週間)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊, 中原計	45	中村編2010b
22	西病棟新営その他電気設備	2007	2008年1月9日～2月14日(1か月)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊	103	本書
23	連絡橋建設	2011	2011年4月4日～4月18日(2週間)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎	100	HPに概要報告書を掲載
24	藤井節郎記念医科学センター新営	2011	2011年10月7日～2012年3月14日(5か月)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎	1800	三阪編2016
25	附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	2011	2011年10月6日～10月26日(2週間)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎	430	三阪編2016
26	大塚講堂改修	2012	2012年4月9日～6月1日(2か月)	徳島大学	中村豊, ○遠部慎, 山口雄治	1030	三阪編2016
27	立体駐車場新営	2012・2013	2012年5月1日～2013年4月19日(11か月半)	徳島大学	中村豊, 遠部慎, ○山口雄治	3610	端野編2015
28	外来診療棟新営	2012	2012年7月2日～2013年1月9日(6か月半)	徳島大学	中村豊, ○遠部慎, 山口雄治	3688	三阪編2016
29	学生支援センター改修	2011	2012年10月31日～2013年2月5日(2か月)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎, 山口雄治	554	三阪編2016
30	渡り廊下建設	2016	2016年11月14日～12月1日(2週間)	徳島大学	○三阪一徳	70	本書
31	解剖体慰霊碑区域	2017	2017年8月21日～24日(4日間)	徳島大学	○端野晋平	20	HPに概要報告書を掲載

(中村, 2003), この地での鉄器生産の存在がうかがえる。第27次調査地点では、後期後葉から終末期に位置づけられる一〇(形)土坑を伴う住居跡や、終末期の突線紐式銅鐸片(端野ほか, 2015)が、第17次調査では異体字銘帯鏡片が確認されている(徳大施設・徳大埋文, 2000)。

第2次調査では、古墳時代前期(布留式期前後)の住居跡や井戸が検出されており(定森・中村編, 2005), 同地点辺りにこの時期の居住域が存在していたことがわかる。古墳時代中期のものとしては、第7次調査で祭祀遺構とみられる溝から須恵器, 勾玉形石製品が(中村編, 2011), 第9次調査で同じ溝の延長部から須恵器に加え, 朝顔形埴輪片が出土している(北條編, 1998)。第27次調査では、古墳被葬者の副葬品とみられる玉類や石製紡錘車が出土しており(端野ほか, 2015), これらの事実は、付近にかつて古墳が存在した可能性を示唆する。第2次調査などでは、掘立柱建物跡や墨書土器, 木製祭祀具, 石帯などが確認されている。これらにもとづいて, 本遺跡周辺を古代の郡衙である名東郡に比定する説が提出されているのは, 前節で述べた通りである。また第2次調査では, 飛鳥時代から鎌倉時代にかけての大溝・水路が検出されている。飛鳥時代の大溝は東西正方向をとるのに対し, 10世紀後葉～11世紀前葉の水路, 13世紀前葉の大溝はやや北に振れた東西方向をとることが注意され, その背後に条里制の変化がうかがえる(定森・中村編, 2005)。

近世の遺構としては, 第11次調査などで水田跡や溝, 井戸, 暗渠が, 第10次調査で木棺墓(北條編, 1998)が検出されている。これらは, 絵図に描かれた「蔵本村」の農民層が残したものとみなせよう。そのほか, 戦前, 現在の蔵本キャンパス一帯は, 旧陸軍や病院に関係する建造物が立地したことや, 空襲にあったことが知られており, 実際に発掘調査でも, これらに関連する遺構や遺物が時折, 発見されている。

(三阪一徳・端野晋平)

文献

- 東潮・中原計・石村友規・大谷育恵・松浦稔, 2006. 徳島市八人塚古墳測量調査報告. 徳島大学総合科学部人間社会文化研究 13, 61-83.
- 福家清司, 2002. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.135-162.
- 藤川智之, 2002. 古代. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.115-134.
- 藤川智之, 2015. 徳島県内における律令期帯金具と出土遺跡, 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 11, 71-84.
- 藤川智之(編), 2002. 観音寺遺跡 I (観音寺遺跡木簡編): 一般国道 192 号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- ふるさと徳島編集委員会(編), 1991. ふるさと徳島. ふるさと徳島編集委員会, 徳島.
- 古田昇, 1996. 徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程. 立命館地理学 8, 61-72.
- 古田昇, 2005. 多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野. 平野の環境歴史学. 古今書院, 東京, pp.209-246.
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査(立体駐車場地点)の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1, 43-97.
- 早淵隆人, 2002. 古代阿波における官衙と祭祀. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.629-648.
- 平井松午, 1998. 吉野川の河川環境と流域史. 東潮(編), 川と人間: 吉野川流域史. 溪水社, 広島, pp.3-25.
- 北條芳隆(編), 1998. 庄・蔵本遺跡 1: 徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査, 徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 1 巻. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 石尾和仁, 2002a. 近世. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.163-180.
- 石尾和仁, 2002b. 中世阿波における集落の展開. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集

- 刊行会, 徳島, pp.647-656.
- 勝浦康守 (編), 1990. 名東遺跡発掘調査概要:名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査. 名東遺跡発掘調査委員会, 徳島.
- 勝浦康守 (編), 1997. 三谷遺跡:徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査. 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会, 徳島.
- 木原克司, 2002. 吉野川下流域の条里施行期と阿波国府の構造. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.611-627.
- 近藤玲, 2003. 徳島の弥生時代:縄文時代から弥生時代へ. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 3, 13-40.
- 近藤玲, 2012. 徳島市眉山周辺の弥生集落の動態. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 10, 31-48.
- 近藤玲 (編), 2014. 南蔵本遺跡:県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第84集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 栗林誠治, 2002. 古墳時代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.99-114.
- 中村豊, 1998. 稲作のはじまり:吉野川下流域を中心に. 東潮 (編), 川と人間:吉野川流域史. 溪水社, 広島, pp.79-100.
- 中村豊, 2002. 縄文から弥生へ. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.245-258.
- 中村豊, 2003. 徳島における弥生時代終末期の鉄生産. 青藍 1, 25-36.
- 中村豊, 2009a. 医療系総合実験研究棟Ⅱ期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1, 1-10.
- 中村豊, 2009b. 西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1, 1-10.
- 中村豊, 2010a. 庄・蔵本遺跡・医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2, 1-9.
- 中村豊, 2010b. 庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2, 11-21.
- 中村豊, 2010c. 概要. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2, 33-42.
- 中村豊 (編), 2008. 庄(庄・蔵本)遺跡:徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 中村豊 (編), 2010. 庄(庄・蔵本)遺跡:徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書, 体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 中村豊 (編), 2011. 庄(庄・蔵本)遺跡:徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書, 弓道場建設に伴う立会調査報告書. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 岡山真知子 (編), 1999. 庄遺跡Ⅲ:大蔵省蔵本団地宿舎新営工事(第3期工事)関連埋蔵文化財発掘調査報告, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第24集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 定森秀夫・中村豊 (編), 2005. 庄(庄・蔵本)遺跡:徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 島田豊彰, 2008. 吉野川流域における中世集落の様相. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 7, 17-28.
- 菅原康夫, 2002. 弥生時代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.63-97.
- 徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 2000. 庄・蔵本遺跡発掘調査概要:新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査. 徳島.
- 徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター (編), 徳島県遺跡地図, 第2分冊. 2006. 徳島.
- 徳島県の歴史散歩編集委員会 (編), 2009. 徳島県の歴史散歩, 歴史散歩 36. 山川出版社, 東京.
- 徳島市教育委員会, 1989. 平成元年度文化財調査報告資料. 徳島市教育委員会, 徳島.
- 氏家敏之, 2002. 先土器時代(旧石器時代). 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.11-28.
- 山川浩實, 1995. 戦争から豊かな未来へ. 徳島県立博物館, 徳島.
- 山川浩實, 2005. 徳島大空襲, 徳島の自然と歴史ガイド 4. 徳島県立博物館, 徳島.
- 湯浅利彦, 2002. 縄文時代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.29-61.